

海を奪いしものへ

黒崎晴生

有明の海 奥深く
海の子宮と呼ばれる“諫早湾”があった
遠く沖へ 干潟が広がる海だった。
ムツゴロウが 元気に飛び跳ね
シオマネキは はさみを愛想よく振る
秋には シチメンソウが紅く色づき 野鳥群れ飛ぶ海。
1997年4月
海閉ざすギロチンが落され “宝の海”が死んだ。

カキも アサリも タイラギも みんな息絶え
黒光りのノリが 茶褐色に変色した
船板の上で跳ねていた魚も 影を潜めた。
潮の流れの変わりが
赤潮を呼び 有明の海を殺した。

漁り船の上から 母ちゃんの姿が消え
漁民の夕餉から 団欒が消えた。
漁を継ぐ息子が 海を失ない
多額の借金背負った漁民が 自ら“いのち”を絶った。
国も 県も みんな見殺し。
有明の海に異変が広がり
海も なりわいも 死んで行く。

“海を奪ったものは 誰だ！”

漁民は裁判を始めた
『今すぐ開門せよ』
有明の漁民は 船上で訴える
『有明海の再生を』
母ちゃんたちの 拳が上がる
『宝の海を返せ』
市民たちの うたごえが沸き起こる
『ムツゴロウ跳ねる 干潟を返せ』 と。

“海返せ”の大合唱が 沸き起こる

(2010年10月11日。 写真展に寄せて)